

メタ倫理学における不整合主義¹

佐々木 拓

はじめに

メタ倫理学の領域には様々な二分法が存在する（例えば、認知主義／非認知主義、動機づけに関する内在主義／外在主義などなど）。多くの場合、メタ倫理学の分野でのわれわれの理解がこれらの二分法に大きく依拠し、また、みずからの理論を構築する際にもこれらの二分法が大きな影響力をもっているということはあながち間違った事実ではないだろう。そして、二分法に基づく以上、われわれの理解は「自分の与する陣営と対立する陣営のどちらか一方が正しい」という方向に流れる傾向にあると思われる。（近年論じられている「ハイブリッド理論」を含め）これらの傾向は二分法の対立を解消・融合に導くものである。しかしながら、近年「対立する立場の双方が共に道德現象の正しい分析を行えていない」とする一方で、「人々は対立する立場の双方にコミットしている」という形で対立構造を積極的に保存する新しい立場が出現している。今のところ、このような立場の例として D. ローブの「道德的不整合主義」、M. ギルの「変動説」および R. フランセーンの「多元主義」が存在している。これらのうち、ローブの立場は道德の領域を全体として混乱したものと見なす点でギルやフランセーンよりもラディカルで極端な立場であり、逆にギルとフランセーンは道德の整合性を一定の程度認めるという意味でより穏やかな立場と言える²。

¹ 本論文は応用哲学会 2011 年度臨時研究大会（2011 年 9 月、於京都大学）および京都生命倫理研究会（2011 年 9 月、於滋賀大学大津サテライトプラザ内サテライトルーム）での研究発表を基にしている。本論執筆にあたっては、両発表における質疑応答でなされた議論から多くの示唆を得た。両研究会の参加者、とりわけ安彦一恵氏および水谷雅彦氏に感謝申し上げる。

² R. フランセーンの立場は正確には「道德的動機づけに関する多元主義」と呼ばれる。本論ではフランセーンの議論は扱わない。

「道徳的不整合主義：意味論の帽子からいかにして形而上学のうさぎを取り出すか」³と題された論文でローブは不整合主義を展開している。この論文は『道徳心理学：第二巻』⁴に発表され、同書にはギルとセイヤー＝マッコード（以下 SM と略）のコメントおよびそれらに対するローブのリプライが掲載されている。本論では、これらの意見の応酬に、シノット＝アームストロング（以下 SA と略）による論争の分析を加える形で、不整合主義という新しい立場の内容を紹介し、最後に私自身の立場から若干の論評を述べたい。以下、次の順序で論述を進める。第1節では Loeb: 2008a に即してローブの議論を簡単に紹介する。第2節では SA とギルの議論を用いてローブの議論をより詳細に分析する。そして、第3節でギルと SM の議論を基に不整合主義への批判を検討した上で、第4節でこの理論の評価を述べたい。

1. ローブの「道徳的不整合主義」

ローブの議論の大筋は、認知主義対非認知主義（もしくは客観主義対反客観主義）という意味論上の対立構造から、非實在論という形而上学的帰結を引き出すというものである。例えば、認知主義者にとって道徳文とは事実的な主張を表すものであるのに対し、非認知主義者にとって道徳文は事実的主張以外のことを表しているとされる。この時、両者は一体何をしているのか。ローブによれば、この筋の議論で論じられているのは「道徳言語の特定の使用法の探求ではなく、実際に人々一般が道徳言語を用いる方法についての仮説」である⁵。この見方が正しければ、われわれの道徳言語の使用法、特に「われわれが道徳言語を用いる際にわれわれは一体何をしているのか」の解明には経験的探求が必須である。そして、これを明らかにするのは、「哲学的に注意深く精査された、個人の内省的な／個人間での比較を扱う／文化横断的な、人類学的かつ心理学的探求」だとローブは主張する⁶。つまり、道徳に関するわれわれの言語傾

³ Loeb: 2008a.

⁴ Sinnott-Armstrong: 2008.

⁵ Loeb: 2008a, p. 356.

⁶ 原文では “careful philosophical informed intrapersonal, interpersonal, and cross-cultural anthropological and

向⁷およびそこから導出される道徳の意味論を明らかにするためには、様々なバイアスを除去した形での大規模な実験哲学的調査が必要だというのが、ローブのメタ倫理学に対する提言なのである。

この提言の一方で、従来の研究では上記の経験的探求はそれほど真剣に取り組まれてこなかった、とローブは指摘する。従来のメタ倫理学者の多くは、自らの内観や少数の（特に学生に対する）インタビューといった、偏った、かつ少数のデータに依拠することが多かった。さらに、自らの理論にそぐわないデータを「誤ったもの」「状況を正確に理解していないもの」として切り捨てるかデータの証拠を格下げする傾向にあった⁸。

経験的調査を基礎としながらデータの切り捨てを行う理論として、ローブは『形而上学から倫理学へ』⁹におけるジャクソンの手法を具体的に批判しているのでここで簡単に紹介しておこう。ジャクソンによれば、コミュニケーションが成立するためには、われわれは言葉の背後にある概念を共有している必要がある。道徳に関して言えば、われわれには「正不正の感覚をもち、なにをすべきかについての意味ある議論に参加できるためにはその習熟が必須であるような」、民衆道徳と呼ばれる「道徳的意見、直観、原理、概念のネットワーク」が存在するとされる¹⁰。ジャクソンは、この民衆道徳¹¹を暴き出すために学生を対象としたアンケート調査を行い（これは「フィールドワーク」と呼ばれている）、その結果をもとに概念分析を行ったのである。

psychological inquiry”である。ibid.

⁷ ローブは道徳の意味論を知るためには人々の言語傾向を知る必要があるという。ここでローブが定義する言語傾向とは「道徳的語彙を使う人のもっている直観、思考及び発話のパターン、意味論上のコミットメント、そしてその他の内的状態（意識的であるか否かを問わず）」の集合に、「反省によって言語使用を改訂する傾向性」を加えたものとされている（Loeb: 2008a, p. 356）。

⁸ この論点は Gill: 2009 や Francén: 2010, SA: 2009 でも指摘されている。

⁹ Jackson: 1998.

¹⁰ Jackson: 1998, p. 130, Loeb: 2008a, p. 368.

¹¹ 正確に言うならば、ジャクソンは人々の大部分が従っているとされる民衆道徳とそれがさらに洗練された「成熟した民衆道徳」を区別して論じている。しかし、この区別は本論の論点から外れるために扱わない。

本論との関連で、ローブによる批判の最大のポイントは、ジャクソンが客観主義を民衆道徳の要素に加え、反客観主義（とりわけ相対主義）を主張する学生のデータを体系的に無視している点である。ジャクソンによれば、自分たちの直観にそぐわないデータはそもそも「共通の」特徴でない点で候補から外れるし、相対主義を主張する学生は「道徳的議論に参加している」という実践と自らのメタ倫理的主張が矛盾するために、彼らの直観は誤っている、というのである¹²。しかしながらローブの観点から見れば、相対主義の学生を「混乱している」と決めつける確たる理由は存在せず、ジャクソンがこのように簡単に自論に反するデータを切り捨てられるのは、不整合主義の可能性に気付いていないからだと言う。ローブからすれば、「きれいな分析のために道徳的な語りのうちのかかなりの部分を切り離すことは、道徳的語彙を使用する人々が実際にしていることを歪めることになりうる」のである¹³。

確かに、経験的調査の結果が出る前に、特定のデータを「間違い」として無視することは不合理のように思われる。しかし、例えば客観主義対反客観主義のような対立するデータの双方を尊重するとどうなるのか。ローブの不整合主義は現在生じているデータの対立を素直に受け入れるべきだとわれわれに提案する。そして、更なる経験的調査が実施された暁には、この対立が解消されない程度にまで道徳の領域にはびこっていることが示されるだろうと不整合主義は予測する。そして、結果として示されるのは、「人々が実際に使用している道徳語の意味には大きな不整合がある」というテーゼである。ローブ自身の言葉を引用しよう。

[われわれの道徳語の意味論には]非常に高いレベルの不整合が存在する、すなわち、われわれの道徳文が個別の信念の発話であるか個別の心情の表明であるかのいずれかだと考えることは意味をなさないほどに、われわれの道徳的語彙の使用をめぐる言語上の傾向性に関しては非常に大きな混乱と相違

¹² Loeb: 2008a, pp. 373-5.

¹³ Loeb: 2008b, p. 413.

が存在する。¹⁴

このことが経験的調査によって明らかにされると信じる立場が道徳的不整合主義というわけである。別の言葉で言い換えるなら、不整合主義とは「道徳的対話に関するわれわれの傾向性の中に根本的で調停不可能な不整合性があるために、道徳の意味論について十全で整合的な理論を定式化することはできないという仮説」だということである¹⁵。

もしローブの不整合主義という見立てが正しいのであれば、われわれが「善い」や「正しい」といった道徳語を使用する際にこれらの語が指示する整合的な概念が存在しないことになる。となると、たとえば「丸四角」という概念が不整合であるがゆえに「丸四角」という様相をもつ事物が現実存在しえないように、そもそも混乱した道徳語が指示する対象（すくなくとも、例えば「善い」という語が指示するような性質）は世界に実在しないことになる。このような仕方では、ローブは意味論上の理論から道徳的非実在論を導出する。

不整合主義の確証は実際の経験的調査を待たねばならないのだが、不整合主義を1つのまじめな可能性として考える根拠がローブによって挙げられている。それは単純に、認知主義や実在論をめぐる直観の不一致が現に存在するということである。これらを巡る論争の存在は哲学者間の不一致の例だと見なせる。さらに、普通の人々の間でも不一致は存在するとローブは言う。ローブの思考をまとめるならこうである。すなわち、1. 人々は何が事実の領域に属し（例えば「地球は丸い」）、何が属さないか（例えば「私はバニラアイスが好きだ」）はちゃんと理解している。2. (a) 道徳語の使用が認知主義的である場合には、人々は道徳文を事実の領域に属すものとして使用するし、(b) 道徳語の使用が非認知主義的である場合には、人々は道徳文を事実の領域に属さないものとして使用する。3. 実際に人々は (a) の方法でも (b) の方法でも道徳

¹⁴ Loeb: 2008a, p. 358. □ は筆者による補足。

¹⁵ Loeb: 2008a, p. 381. 傍点は筆者による。

文を使用する。4. ゆえに、人々は認知主義にも非認知主義にもコミットしている。このような事態は、現に個人個人の間で、また文化横断的に、さらには1人の個人の内部ですら生じうるとローブは語っている¹⁶。

本節を締めるにあたって、ローブの不整合主義とマッキーの錯誤理論との区別を指摘しておこう。これは SM の指摘によるのだが¹⁷、不整合主義と錯誤理論の違いはその非実在論的主張の導出の仕方にある。後者が価値語の指示する対象の实在／非实在といった形而上学に依拠するのに対して、前者の非实在論は意味論上の不整合性に依拠する。すなわち、不整合主義に特徴的なのは、客観性や動機づけの力や真理性を併せ持つ形而上学的存在の有無から非实在論を帰結するのではなく、道德語の指示概念がそもそも不整合であるという意味論上の主張から非实在論が引き出されるという点なのである。

2. 不整合主義の分析

本節では、SA: 2009 と Gill: 2009 の議論に依拠しながら、ローブによって明示的に語られていない不整合主義の2つの特徴を明らかにする。1つは、不整合主義が従来のメタ倫理学に潜む隠れた前提の否定から導出されるという論点であり、もう1つはメタ倫理学における領域区分の議論である。なお、実際のところ、SA は実在論対表出主義という二分法を、ギルは動機づけに関する内在主義と外在主義という対立をそれぞれテーマとして扱っているのだが、両者とも自らの議論が別種の二分法にも適用可能な点を認めているため、本節の議論では対立軸の種類の差異を特に問題にしない点を注記する¹⁸。

¹⁶ Loeb: 2008a, p. 364.

¹⁷ SM: 2008, p. 411, n. 1.

¹⁸ ギルについては Gill: 2008, p. 388 を参照。SA については明言されていないが、SA が自らの枠組みを使用してローブの不整合主義を論じている以上、SA の議論はローブの枠組みには適用可能だとみなしてよいだろう。SA: 2009, pp. 250-2 を参照。

2.1 メタ倫理学における共有前提

ギルと SA によれば、従来のメタ倫理学説には次の2つの前提が暗黙の内に存在し、不整合主義はこの前提の否定から生じる立場である¹⁹。SA の定式化を借りるなら、その前提は次のように示される。

決定可能前提 The Determinacy Assumption: 道德言語の標準的な使用の中にはその使用について1つの意味論上の理論を正しいもしくはよりよいとするような特徴をもつものがある(注: 正しい=真、よりよい=よりよく正当化される)。

一様性前提 The Uniformity Assumption: すべての標準的な道德言語は同じ種類の意味論をもっている。²⁰

先に指摘したように、従来のメタ倫理学説は比較的少数の経験的証拠を基に自らの学説を構築し、自説に不都合なデータを「標準的ではない」として退けてきた。この手法が正当化されるのは、この2つの前提があるためだと SA は主張する²¹。しかしながら、不整合主義の可能性が示された以上、これらの前提は経験的調査による確証を取り付ける必要がある。そして、その結果によってはこれらの前提が覆されるかもしれないのである。

SA によれば、2つの前提の否定によって以下の立場が提示される。

[非決定説] 非決定説論者は決定可能前提を否定し、その結果、言語使用について表出主義と实在論のいずれか一方をよりよいもしくはより正しいと

¹⁹ ギルはこの2つの前提をひとまとめにして「一様性・決定可能前提」と呼び、この前提の否定から不整合主義と自らの「分離主義的変動説」とを導出している。SA はギルの議論を基に自らの分析を展開しているのだが、本論で見るように、ギルの分析は不十分である。

²⁰ SA: 2009, pp. 238-9.

²¹ この点は Gill: 2009 も参照。

決める特徴は言語のいかなる使用にも存在しないと主張する。

[変動説]: 変動説論者は一様性前提を否定し、以下のことを主張する。(a) 道徳言語使用のいくつかは完全に表出主義に適応し、(b) 別の道徳言語使用のいくつかは完全に実在論に適応するが、(c) どちらの種類の使用が主要であったり逸脱的（すなわち非標準的）であったりすることはない。²²

私の分析では、ローブの不整合主義は一様性前提と非決定説の組み合わせから導出される。対して、ギルらの変動説は決定可能前提と変動説の組み合わせである。すなわち、これらの立場は先の 2 つの前提の一方を否定することで生じる立場である²³。この分析を基に不整合説を説明し直すのならこうなる。すなわち、(a) 道徳語には 1 つの意味しか存在しない、(b) 実際の道徳語の使用法には対立する意味が混在する、(c) ならば道徳語に存在する 1 つの意味とは混乱したものである、(d) ゆえに道徳語の意味が指示する対象は存在しない。

不整合主義との対比のために、変動説の説明をしておこう。変動説には意味論を変える要素に応じて様々なバリエーションが生じる。ここでは検討の余地のあるものとして 4 つのバリエーションを紹介する。

意味論的名辞変動説: ある道徳語は表出主義的な仕方理解されるべきであり、別の道徳語は実在論的な仕方理解されるべきである。²⁴

意味論的話者変動説: 道徳的言明がある話者によってなされた時にはその言

²² SA: 2009, p. 239. []は筆者による。Gill: 2008, p. 387, p. 394 も参照。

²³ ギルは不整合主義を 2 前提の否定と解釈し（脚注 14 を参照）、ローブの説を自説と同様変動説と呼んでいる（Gill: 2009, p. 216 n.2 参照）。対して、SA は不整合主義を穏当な非決定説とある種の変動説の組み合わせと解釈しているようにとれる（SA: 2009, p. 250）。しかし、これらの解釈は誤りである。というのも、一様性前提を保持しなければ、ローブの議論から非実在論が帰結しないからである。

²⁴ SA: 2009, p. 240.

明は表出主義的に理解されるべきであり、同じ言明が別の話者によってなされた時には實在論的に理解されるべきである。²⁵

意味論的トピック変動説：道徳的言明があるトピックについてなされる場合にはそれは表出主義的に理解されるべきであり、別のトピックについてなされる場合には實在論的に理解されるべきである。²⁶

意味論的文脈変動説：道徳的名辞の使用にまつわるメタ倫理学上の対抗者と伝統的にみなされる2つのコミットメントの内、一方のコミットメントを含むものとして分析されるのが最善である仕方、ある道徳的名辞が使用されるような文脈が存在する一方で、対抗するコミットメントを含むものとして分析されるのが最善である仕方と同じ道徳的名辞が使用される別の文脈が存在する。²⁷

さらに変動説の具体的な例として、ギルの「分離主義的変動説」をごく簡単に紹介しておこう。ギルの理論は話者変動説、トピック変動説、文脈変動説を組み合わせたものである。ギルが直接扱う動機づけの内在主義／外在主義の区別に応じて説明するのなら、次のような事態が生じうるということである。すなわち、ある人は内在主義的に「不正」の語を使用し、別の人は外在主義的に「不正」の語を使用する。また、あるトピック（例えば人工妊娠中絶）については「不正」は外在主義的に使用される一方で、別のトピック（例えば殺人）については内在主義的に使用される、などなど。このように意味が様々な要素によって変動する一方で、その変動は規則性をもち、人、トピック、文脈の内部でひとつのまとまりを作っており、他のまとまりと混同されないようになっている。このようなまとまりをギルは「ポケット」と呼んでいるが、ポ

²⁵ SA: 2009, p. 242.

²⁶ SA: 2009, p. 245.

²⁷ SA: 2009, p. 248, Gill: 2009, p. 8.

ケットが形成されるに十分な程度に各人、トピック、文脈における意味論はまとまり、かつ、分離されているというのがギルの考えである²⁸。

変動説は特定の領域において整合的な意味論を認める点で不整合主義とは異なる。これは逆に言うと、不整合主義では道德語の使用について総体的な「標準的領域」を想定しているのに対して、変動説ではそのような「ひとつの道德」といったものは存在せず、「標準的」（と称される）細切れの領域が並列して存在するだけということになる。この違いは「われわれは『道德』という言葉で1つの同じものを語っているのか」という大きな問題に関わってくるのだが、不整合主義の検討として次節で再度触れる。

2.2 メタ倫理学の3つの領域

不整合主義を理解するためにもう1点注意すべき点がある。それは不整合主義がどのような種類のメタ倫理學説であるか、という点に関わる。ギルはメタ倫理学の領域を次の3つに区分している。

1. 道德語の日常的使用法についての最善の分析を提供することを目的とする「記述的メタ倫理学」
2. 道德的特性は実在するのか、するとすればそれはどのようなものかを決定する「存在論的メタ倫理学」
3. われわれがいかなる仕方で道德語を使用すべきかを明らかにする「指令的メタ倫理学」²⁹

ローブの不整合主義やギルの変動説が記述的メタ倫理学の學説であり、指令的メタ倫理学のものではないということには一定の注意が必要である。というのも、「われわれが道德語を理解可能な仕方で使用するためには、特定の仕方で道德語を使用すべき

²⁸ Gill: 2008, 2009 を参照。

²⁹ Gill: 2009, p. 215 note 1, Gill: 2008, p. 394 も参照。

だ」とか「一定の人々がこのように道德語を使用しているのだから、われわれすべてがそのように道德語を使用すべきだ」という形での批判は不整合主義にとってはお門違いだからである。これらの批判に対して、不整合主義は「本学説は記述的メタ倫理学に属するので、その正否は経験的調査によって確証されるのが筋である」と述べるだけでよい。また、ギルが示唆するように、われわれは記述レベルで不整合主義や変動説を採りつつ、規範レベルで認知主義や非認知主義の何らかの学説を採用しても問題がない³⁰。

なお、フランセーンの示唆するところでは、修正主義をとることでわれわれの道德語の使用に関する直観の不一致を解消する試みは指令的メタ倫理学に属する（フランセーン自身は「規範的メタ倫理学」という語を使用する）³¹。

3. 不整合主義に対する批判

最後に、不整合主義の検討に移ろう。まず検討したいのは、SM がローブに対して行った批判である。SM はローブが主張するような経験的調査の重要性を認めつつも、証拠として扱うデータの範囲はローブほど広くとるべきではないと主張する。というのも、SM によれば、メタ倫理学の対象はローブの指摘する「道德言語を使用する人々一般」³²ではなく、「道德的思考と言説の真正な事例」としてカウントされるべき「われわれ we」³³の使用法だからである。人々一般の道德語の使用の中には、明らかな誤用や、短時間での翻意が含まれるものなど、学説を構築するためのデータとしては信用度の低いものが含まれている。メタ倫理学説はこれらを見捨て、「われわれが道德と特徴づけるものを実際にわれわれがどう考え、どう語るかの中核にあるもの」を扱うべきだというのが SM の批判である³⁴。

この問題については、ローブは SM へのリプライ論文で回答している。そこでの答

³⁰ Gill: 2008, p. 394.

³¹ Francén: 2010, p. 137, p. 142.

³² SM: 2008, p. 410.

³³ op. cit. p. 408.

³⁴ ibid.

えは、われわれというものが存在する可能性を否定しはしないものの（なぜならばこの集団が存在するかどうかは経験的な問題なので）、そのような調査結果がでることには大きな不安を抱かざるを得ない、というものである。その根拠としてあげられているのは現に存在する不一致である。例えば、認知主義対非認知主義の論争において、両者は「標準的使用」の分析をめぐる争っている。そして現状においては、互いにそれなりの説得力をもっているという点は誰もが認めるところであろう。この状況で、片方の意味論的主張を「不適切な」、すなわちわれわれの使用法でないと切り捨てて恣意的でない基準が果たしてありえるだろうか、とローブは考える³⁵。何が「標準的使用」なのかは経験的調査によって確証されるべきである。しかし、その調査結果が出る前に恣意的に「標準」を定めて少なくないデータをあらかじめ排除することは記述的メタ倫理学の領域では避けられなければならない。

SM は一様性前提と決定可能前提の両方を受け入れていると言ってよいだろう。ローブの議論は決定可能前提を否定することで、道徳という領域全体に不整合があると主張するわけである。その一方で、一様性前提を否定する変動説側からは、不整合主義の非決定的な部分に批判が向けられる。これがギルによる批判である。変動説の観点からは、道徳の意味論は人物、文脈、トピックといった変動の要素があるものの、異なる意味の領域は十分に分離されており、いわば意味の「ポケット」が形成されている。例えば、ギルは「happy」という語をアナロジーとして使用する。すなわち、この語がある人の感情を表現するのに用いられているか（例えば、親切にされた時に「嬉しい」と感じるような意味）、それともある人の状況を表現するのに用いられているか（例えば、ある人の人生全体の記述をする際に使われる意味）が容易に分かるように、道徳語が、ある人によって／ある文脈で／あるトピックについて用いられている際に、異なる意味論の領域はしっかりと分離されていて、かつそのポケットを支配している意味論をわれわれはちゃんと把握できる、と言うのである³⁶。例えば、自国の法や政

³⁵ Loeb: 2008b, p. 418.

³⁶ Gill: 2008, pp. 390-1.

策、習慣の善し悪しを議論している際には客観主義的な道徳的名辞の使い方をし、遠い昔の人々の道徳的地位を議論する際には相対主義的な道徳的名辞の使い方をする人がいても、その人が特別道徳的名辞の使用に関して混乱しているとは思われないだろう。

この批判に対してもローブは可能性を認めつつも、ギルの主張する「ポケット」の存在は疑わしいと回答している。ギルの主張の中心的な問題は、もしギルの主張が正しいのであれば、人々はギルの主張する「分離主義的変動説」へのコミットメントをもっていなければならない、という点にあるように思われる。ギルはこの点を明示してはいないが、もしギルの仕方で道徳の整合性が保たれているとするのなら、人々は文脈や人物やトピックの違いに応じて、われわれは「別々のことをしている」ことになるだろう。そして「正しい」や「不正である」といった語がトピックや文脈や人物に応じて意味を変えらなければならないことを理解していなければ、自分たちが道徳について「整合的なことをしている」とは言えないはずである³⁷。しかし、道徳語の使用に関して自分たちが「同じことをしている」と実際に多くの人々が考えていないと主張する強い根拠があるわけではない。

経験的データを根拠とする際にはある程度の理想化が必要であることはローブも再三にわたって認めている。しかし、だからといって、SM やジャクソンのように中核的な「適正使用集団」なるものを想定し、そこからはみ出るものを「不適切な使用」として退けることは理想化を超えており、「主題の変更」として批判される³⁸。このことはギルの議論にも当てはまるだろう。つまり、道徳の領域をポケットの細切れにして、意味論をその内部の問題に限定することはそもそもの記述的メタ倫理学の主題を変更していることにはならないだろうか。少なくとも、人々が道徳的言語を用いて行っていることは「一つの道徳的実践」であると考えるのが従来のメタ倫理学の姿勢であるのなら（ローブとSM、そしてジャクソンはこの立場だと言えるだろう）、ギルの

³⁷ Loeb: 2008b, pp. 416-7.

³⁸ Loeb: 2008a, p. 357, p. 370, Loeb: 2008b, p. 420.

立場では人々がそれとはまるで別のことをしているのだと判断せざるを得ないことになるだろう³⁹。

ギルが一様性前提を批判して次のような問いを投げかけているのは非常に興味深い。「[キリスト教の]牧師と[ユダヤ教の]ラビ、福音主義者、功利主義者、そしてビーバースとバッドヘッドがしている道徳的会話において、全員が同じメタ倫理的コミットメントをもっているなどどうして考えられようか」⁴⁰。しかしこの問いに対して「そもそも別々なことをしているのだから整合的だ」というのと「同じことをしているのだけれども、道徳とはそもそも混乱しているのだ」というのとではどちらがマシだろうか。

4. 不整合主義の評価—おわりにかえて

本論を終えるにあたって、不整合主義に対する私なりの評価を述べたい。SA による不整合主義の評価は「メタ倫理学における論争の行き詰まりを説明しうるものの、対立する理論の魅力を説明することはない」というものである⁴¹。対して、変動説には「論争の行き詰まりも対立する理論双方の魅力も説明できる」とより高い評価を下しているように見える⁴²。しかしながら、変動説の抱える多くの問題点を SA が指摘している点を見逃してはならない⁴³。結局、変動説にせよ不整合主義にせよ、メタ倫理学という領域の行き詰まりを象徴するだけの理論だというのが SA の評価だと言えそうである。しかしながら、ここで注意しなければならないのは、不整合主義や変動説が記述的メタ倫理学の理論だということである。従来のメタ倫理学理論が「行き詰まり」の体をなしているのは、記述のレベルでというよりも、規範のレベルでの主権争いのように思われる。

³⁹ ギルのように道徳の領域を細切れにすると、道徳的不一致の存在の問題や、異なるトピックや文脈をまたいだ推論の可能性の説明について困難が生じると SA は指摘する。SA: 2009, pp. 245-50.

⁴⁰ Gill: 2008, p. 393. []は筆者による。

⁴¹ SA: 2009, p. 239 参照。

⁴² *ibid.*

⁴³ 脚注 39 参照。

ロープが批判する従来のメタ倫理学では記述的理論としての仕事と規範的理論としての仕事の双方が確かに目指されている。とはいえ、これらの仕事が明確に分離されているとは言えないし、そもそもメタ倫理学の理論に期待されているのは、記述的能力と規範的能力のどちらか一方だけではなく、双方の能力を同時に満たすことだとも言われるかもしれない。また、道徳言語の使用法の分析に際して、二分法における対抗者同士が互いに相手の仕方での言語の使用法を「逸脱的」と切り捨てる営みそれ自体が、自らの用法こそが「標準的」であるべきだと主張していることに他ならない。これらのことは、われわれが記述的な仕事を目指している時に、意識せずに規範の仕事に手を染めている可能性が十分にあることを示唆している。

この点をふまえれば、前節最後の問い自体が規範的な問いだということがわかる。不整合主義をとるならば、「それはどちらがマシということはありません。経験的調査の結果を受け入れるだけです」と答えるのが適切な回答ということになる。そして、ここから明らかになるのは、「どのような使用法が正しいのか」という問いに一切答えないという点で、不整合主義は純粋な記述的メタ倫理学説と呼べる数少ない理論の1つだということである。そして、規範的レベルの仕事を理論の中に含まないという観点から見れば、メタ倫理学の中に領域区分を持ち込むことで、メタ倫理学上の問題の1つに（経験的な調査という方法による）部分的解決の道を開いた理論として不整合主義には肯定的な評価を与えることができそうである。

加えて、記述的・規範的という領域の分離は、レベルごとに異なる理論を組み合わせで混合理論とでも呼べるものを作ることを可能にする。例えば、動機付けにかんする理論として、記述理論としては不整合主義を採用し、規範理論としては内在主義を採用するということも可能になる。そのような混合が認められれば、多くの一見対立しそうな理論がレベルの違いの下に共存することが可能になるかもしれない。となると、現在の規範理論としてのメタ倫理学および規範倫理学と対立するように見える、様々な脳神経科学倫理学研究を記述理論として再評価する道が見えるかもしれない。これもまた、不整合主義が受け取るべき肯定的な評価と言えるだろう。

しかしながら、記述レベルと指令レベルの区別を行うということは、両者の理論の間に決定的なギャップを認めることでもある。そこで問題になるのは、いわゆる「ヒュームの法則」である。すると、記述レベルの理論によっては規範レベルの理論を正当化することができないために、レベルをまたいだ理論間の関係が新たに問い直されなければならない。加えて、指令レベルの理論が（記述理論以外の）何によって評価されるべきなのかを再考する必要があるだろう。不整合主義の出現はメタ倫理学の行き詰まりにわずかな解決の道を見いだす一方で、さらなる困難を突きつけることになったと言える。

参考文献

- Francén, Ragnar: 2010. "Moral Motivation Pluralism". *Journal of Ethics*. Vol. 14, pp. 117-148.
- Loeb, Don.: 2008a. "Moral Incoherentism: How to Pull a Metaphysical Rabbit out of a Semantic Hat". *Moral Psychology*. Vol. 2, pp. 355-385.
- : 2008b. "Reply to Gill and Sayre-McCord". *Moral Psychology*. Vol. 2, pp. 413-421.
- Gill, Michael B.: 2008. "Meta-ethical Variability, Incoherence, and Error". *Moral Psychology*. Vol. 2, pp. 387-401.
- : 2009. "Indeterminacy and variability in meta-ethics". *Philosophical Studies*. Vol. 145 (2), pp. 215-234.
- Jackson, Frank: 1998. *From Metaphysics to Ethics*. Oxford University Press.
- Sayre-McCord, G.: 2008. "Moral Semantics and Empirical Inquiry". *Moral Psychology*. Vol.2, pp. 403-411.
- Sinnott-Armstrong, Walter ed.: 2008. *Moral Psychology, Vol. 2: The Cognitive Science of Morality*. Cambridge: MIT Press.

Sinnott-Armstrong, Walter: 2009. "MIXED-UP META-ETHICS". *Philosophical Issues*. Vol. 19, pp. 225-256.

(ささき たく 立命館大学文学部 非常勤講師)